#### 平成23年度

## 講座「丹波学」

### 『丹彼ゆかりの女性たち

~戦乱を生き抜いた「妻」や「毋」~』



(財) 兵庫丹波の森協会

丹波の森公苑

#### 目 次

1	講座「丹波学」の開講にあたって	•••	1
2	講座内容		
	(1) 春日局 ~乳母の力で逆境から転換~		3
	(2) 市と浅井三姉妹の生涯 〜大河ドラマ『江 姫たちの戦国』の放映にあた。	 って~	8
	(3) 先人に学ぶガレリアフォーラム	··· 1	4
	(3) 明智光秀と細川ガラシャ	1	8
	(4) 明智光秀の妻 凞子 ~その愛と献身~	··· 2	2
3	講師プロフィール	2	6
4	編集後記	2	7

#### 1 講座「丹波学」の開講にあたって

#### (1) 丹波の森構想

1988 年、丹波地域が目指すべき姿とし て、住民代表者によって、「丹波の森宣言」 が発表されました。そして、この宣言を実 現するために、1989年3月、丹波の森構想 が策定されました。丹波地域をひとつの大 きな森「丹波の森」と位置づけ、緑豊かな 自然や伝統文化など、地域の特性や資源を 生かしながら、人と自然と文化、産業の調 和した地域づくりを、住民、事業者、行政 が一体となって推進しようとするものでし た。時代はまだバブル経済の最中。都市化 の波におされ、お金と物が優先される時代 でありました。そうした中で策定された丹 波の森構想は、当時としては異質なもので あったかもしれません。しかし、あれから 20年。世の中は、環境問題への真摯な取り 組みが始まり、安心安全な食や農への関心 が高まり、昔ながらの景観や田園志向のラ イフスタイルがあこがれの対象となりまし た。東日本大震災を機に人々はあらためて 「絆」ということを考えはじめました。「丹 波の森構想」にようやく世の中が追いつい てきたと言えるのかもしれません。

もちろん、若者が定住できる町でなければ、農業や集落も維持できません。産業振興は大きな課題です。幸い、JRの電化・複線化、舞鶴自動車道や北近畿自動車道の整備などが進み、阪神都市圏との距離は短縮され、新たな可能性が生まれました。しかしながら、それは開発の波にのみこまれるものであってはならないと考えます。丹波らしさを大切にした上での産業振興でなければならないと考えます。

そうした上で、この丹波の森構想は大きな 指針であり、よりどころであったといえま す。農産物をはじめ「丹波ブランド」が広 範に周知されるようになりました。篠山城 界隈は、平日でも多くの散策者で賑わって います。秋には丹波市の各寺院の紅葉狩り に多くの観光客が阪神間から訪れます。

講座「丹波学」は、「丹波の森宣言」の中の「丹波の文化景観及び歴史的遺産を大切にし、個性豊かな地域文化を育てます」という提言を具現化するために、平成8年度から開講しています。これまで多くの方々に受講いただき、その中から歴史ボランティアとしてご活躍いただく方々や団体も生まれ、地域の活性化に寄与いただいています。

東日本の被災地のある町では、学校の授業に「ふるさと科」を創設し、復興への手がかりにしようとしています。自分らしく生きるために「自分は何者か」を追求する。そのために、「ふるさとを知る」ことの重要性を考えているようです。

#### (2) 平成23年度のテーマ

今回のテーマは、『丹波ゆかりの女性たち〜戦乱を生き抜いた「妻」や「母」〜』です。戦乱の世にあって、女性たちは時代に翻弄されて生きてきたという言い方もあるかもしれません。しかし、男たちが下した決断や行動の陰に、女性たちの願いや思いは少なからず影響を与えたと考えます。そうしたものに思いを寄せることでこそ、真実に迫ることができるのではないかと考えます。

丹波地域の歴史を探る時、京都丹波の歴 史と切り離して考えることはできません。 昨年度に引き続き、今年度も京都府亀岡市 を訪問し、広い視野から地域の特性をとも に学び、今後の連携を模索します

#### (3) 講座内容

- ■テーマ 『丹波ゆかりの女性たち ~戦乱を生き抜いた「妻」や「母」~』
- ■期 間 平成23年9月10日(土)~10月22日(土)
- ■場 所 丹波の森公苑多目的ルーム、ガレリアかめおか(京都府亀岡市)

#### ■日 程

日時	テーマ	講師	場所
9月10日(土)	『春日局	田端泰子氏	丹波の森公苑
13:30~15:30	~乳母の力で逆境から転換~』	(京都橘大学名誉教授)	多目的ルーム
9月17日(土)	『市と浅井三姉妹の生涯	太田浩司氏	丹波の森公苑
13:30~15:30	~大河ドラマ「江 姫たちの戦	(長浜市長浜城歴史博物	多目的ルーム
	国」の放映にあたって~』	館参事)	
9月24日(土)			
10:30~12:00	養源院見学		養源院(京都
	(京都市東山区)		市東山区)
13:30~15:30	先人に学ぶガレリアフォーラム	小和田哲男氏	ガレリアかめ
	『細川ガラシャ・江・春日局	(静岡大学名誉教授)	おか(京都府
	~女性たちの戦国~』	田端泰子氏	亀岡市)
		(京都橘大学名誉教授)	
		福島克彦氏	
		(大山崎町歴史資料館館	
		長補佐)	
		黒川孝宏氏	
		(亀岡市文化資料館館長)	
10月 1日(土)	『明智光秀と細川ガラシャ』	黒川孝宏氏	丹波の森公苑
13:30~15:30		(亀岡市文化資料館館長)	多目的ルーム
		山崎昭典氏	
		(ギタリスト・作曲家)	
10月22日(土)	『明智光秀の妻 熙子	中島道子氏	丹波の森公苑
	~その愛と献身~』	(歴史作家・日本ペンクラ	多目的ルーム
		ブ会員、福井工業大学客員	
		教授)	

#### 2 講義内容

#### (1) 春日局

~乳母の力で逆境から転換~ 京都橘大学名誉教授 田端泰子

#### はじめに

兵庫県にゆかりの春日局の一生を辿り、逆 境のなかで、どのようにして幕府に欠くべか らず女性「出頭人」となったかを考えてみた い。

#### 1 春日局の父母とその一族

春日局の本名は"福"である。父は斎藤利三、母は稲葉通蛸の娘であるが、福は、父の死後、母方の一族稲葉重通の養女となっている。

福の誕生は丹波黒井城下であったと推測される。天正7年(1579)のことである。天正6年・7年のころ、斎藤利三の主君明智光秀は、織田信長の命によって、盟友細川藤孝・忠興とともに、丹波・丹後攻略に余念のない時期であったため、光秀自身は坂本城と亀岡城を拠点に軍勢を動かしていた。したがって光秀の重臣中「随一」といわれた斎藤利三が、丹波平定の拠点としての黒井城に居住していたことは、充分に確実性のある事実であったと考える。

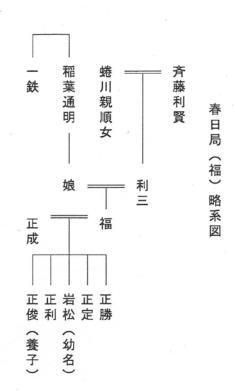
利三はそれまでに松山新助、斎藤義龍、稲 葉一鉄そして織田信長に仕えていた。そして 最終的に仕えた主君が、明智光秀であった。

光秀は血縁的にも利三に大変近く、利三の 叔父に当たるから(系図参照)、利三にとって も安心して仕えられる主君であったのだろう。

一方、福の母方の祖父稲葉通明は稲葉一鉄 の兄にあたる人である。一鉄は信長、秀吉に



仕え、関ヶ原合戦では東軍に鞍替えをし、その功績で豊後国に五万石の領地を徳川家から 拝領する部将である。この一鉄は福にとって は母方の大叔父に当たる(系図参照)。利三と いい、一鉄といい、今から考えると驚くほど の主君の取り替えぶりではあるが、それだけ 戦国時代から織豊政権期にかけては、主君さ えも自分の判断で選び取らなければならない 難しい政治状況のなかで人々は生きていたこ とがわかるのである。



#### 2 本能寺の変の影響と福の結婚・離婚

天正10年(1582)6月に起こった本能寺の変は、福の家族の様相を一変させた。父の主君明智光秀は信長を討つことに成功するが、山科小栗栖で最期を遂げる。光秀の重臣であった父・斎藤利三は自殺したとも、捕らえられて、斎藤和三は自殺したとも、捕らえられて、斎がに処せられたとも伝えられている。福はこの年、わずか四歳であった。父の遺骸は父の友人海北友松と東陽院長盛が秘かに奪い取って、真如堂後ろの墓域に手厚く葬ったとされている。光秀と利三ら主従は「謀叛人」の汚名を着せられたのだから、以後残された家族がどれほど苦しい生活を強いられたかは、想像に難くない。

福と母は、貧窮に苦しんだようである。その時手を差し延べたのが、先述の海北友松と東陽院長盛の二人である。二人は利三と茶の同志でもあった親しい友人だったので、利三の遺骸をこっそり盗み出して長盛の勤める真如堂東陽院奥の墓地に葬り、また利三の遺族の面倒をみたのであろう。

福はその後母方の一族中の稲葉重通の養女になり、同じく稲葉家の養子となっていた稲葉正成の次妻となり、四人の男子を産む。夫正成は豊臣秀吉ついで小早川秀秋に仕え、関ヶ原合戦時には秀秋の裏切りに同調するが、のち美濃国谷口に閑居する。閑居した時正成はまだ31歳であった。そのためか、福は四人の子どもを拘えたまま夫と離婚している。福と子ども、そして福の母は再び「一貧益甚」、状態となった。経済的にも精神的にも苦しみは又倍増したのである。この時代、福一家に手を差し延べたのは、再び友松と長盛という亡き夫の友人たちであったという。戦乱の続く殺伐とした時代にあっても、人の心は現在と異なることはなかったのである。福はそ

の後この二人に恩返しをしようと決心することとなる。

#### 3 乳母となった福と、養、君徳川家光

慶長9年(1604)7月17日、秀忠とお江の間に待望の男子家光が生まれる。家康は喜び、 自身の幼名「竹千代」を家光に名乗らせる。

徳川家は家光誕生とともに早速行動を開始し、乳母を募集する。何らかの選考過程を経てその乳母に福を抜擢した。そして7月23日には水野・岡部ら譜代の家の子供と稲葉正勝(福の長男)の三人の小姓を決定し、その後小姓は6人に増員する。福が乳母に決まったため、長男正勝も小姓に選ばれた、とする方が正確であろう。こうして福とその一家は、母子で将軍家の長男家光の養育に携わることとなった。

乳母とその子が養君の側に仕え、心を込めて養君を育てるという姿は、中世の初期から武家社会で普遍的に見られた様態であったので、別に不思議はない。この家光の場合が特別なのは、家光の小姓が多数であることである。選ばれた小姓たちは徳川家の譜代家臣の家から選りすぐりの子ども達を家光誕生と同時に付けたのであるから、家光の幼いころからの教育環境は申し分ないものであったといえる。

しかし、家光の養育については、徳川家は 大胆かつ周到な方針で臨んでいる。それは家 光が満3歳になった時から、極めて優秀な「傅 」役を家光に付けたことにあらわれている。 傅役に決定したのは、青山忠俊、酒井忠世、 土井利勝の三人であった。いずれも家康から 秀忠に仕え、秀忠の側近あるいは家老(酒井) となり、土井利勝に到っては秀忠死後家光に も重用され、幕府大老のはじめといわれたそ うそうたる重鎮ばかりである。「剛勇」の青山、 「厳正」な酒井、「明敏」な土井と世間で評さ れたすぐれた教師陣が、家光の周りを取り囲 んでいたことになる。例えば青山忠俊はのち 老中になったが、公衆の面前で家光を叱正し たため、家光が怒り、改易・減封に処せられ たこともあった、という豪傑である。

優秀な教師陣に特別厳しい教育を受け、同年代の側近の小姓たちと競い合って成長するという環境に置かれた家光の心理的負担がどれほど大きなものであったかは、現代人なら容易に理解することができるだろう。『徳川実紀』に、家光の「不予」(病気)、「咳気」(咳が止まらない)が成人後もよくあらわれていること、福の邸宅への訪問が、病気見舞い以外にも見られることは、いずれも家光が福のもとへ行くことを必要としていたことを物語る。家光が成長したあとも、福は家光の乳母役割の延長として、家光の安息所、避難所であり続けたと考える。

#### 4「春日局抜参り」の実像

お江は家光を生んだあと、忠長(幼名国松)という男子と、和子という女子を産んでいる。家光の元にも忠長の元にも、近習達が集まり、その近習たちにはお江のもとから夜食などが出されたが、お江は国松には家光のもとへ渡すよりも"潤沢"に夜食などを提供していたので、お江が国松をかわいがっていたことは臣下の者には明白であったようである。一方、秀忠は嫡子決定を先延ばしにしていたので、家光の養育を担当している福は気が気でならなかった。この状況の中で福は思い切った行動を起こす。

福は譜代の永井氏兄弟や傅青山忠俊と相談し、ある思いを秘めて、伊勢参りを装い、関

所手形を取得し、江戸から駿府城の家康の元を訪れ、直訴する。おそらくは「竹千代様を嫡子にお決めください。それもぜひ家康様の 御首らの手で」という訴えであったと思われる。

この訴えを受けとめた家康は、駿府城から 江戸城の秀忠・お江と子供達のもとへ出向き、 お江と秀忠を訓戒し、その結果、正嫡を家光 と決定した。この時、家康は秀忠夫婦に対し、 「国松が息災で成人すれば国郡主ともなり、 竹千代の家来となって奉公する以外に道はない。だから、幼少よりそう仕向けることが大 事であり、結局は国松のためである」と述べ、 「嫡子を廃して庶子を取り立てる事は、天下 が乱れる原因である」と諭したという。家康 の言にお江は赤面して口をつぐんだという。

こうして秀忠の嫡子は家光に決定した。福 の必死の願いは家康の裁断で聞き入れられた。 事態が解決を見た背景には、このころ江戸城 の秀忠よりも駿府城の家康の方に重大事項の 決定権が握られていた時代であったこと、ま た徳川幕府が豊臣氏を倒した元和元年7月ご ろより、全国政権として法・制度の整備に重 点を置く方針を樹立していた時代であったこ とによると考える。以後江戸時代のあらゆる 階層で基本となる「長子単独相続制」という 家族制度の基礎は、大御所家康の判断と決行 によって、将軍家から先ず始められ、手本と されたのである。こうした政治状況を福はし っかりと見据え、的確な行動を起こしたのが 「抜参り」であったと思う。

#### 5 福の新しい職務

家光の成長に伴い、福の乳母としての役割 は次第に減少するが、福には別の重い職務が 与えられることになる。 徳川幕府に対して関ヶ原合戦直前から大名家より送られてきた人質は「大名証人」と呼ばれていたが、福は江戸に住む大名証人のうち、女性証人に関する事項を扱う任務を与えられた。徳川家に服属した大名家とはいえ、その扱いには難しい点が多かっただろう。

次に与えられた職務は寛永3年(1626)からの大奥の統率という大役である。大奥はいつ出来たのか正確な年代はわからないが、元和4年(1618)に大奥法度が制定されているから、このころを成立時期と考えてよいだろう。秀忠時代である。本来なら大奥統率の任にあたるべきお江は寛永3年に亡くなってしまい、家光の正室となった公家鷹司信房の娘はこの前年に家光の元に輿入れしたばかりであった。特に公家が幕府機構のトップに入ることに強い警戒感を持っていた幕府は、公家出身の正室よりも、武家出身の福に白羽の矢を立てたのであろう。

福の第三の職務は、天皇家に対する幕府側の交渉役として折衝にあたることである。寛永6年(1629)「御乳母」福は上洛し、参内を許され、後水尾天皇から「春日局」という局名を拝領する。10月のことである。翌11月、7月の紫衣事件で気分を害した後水尾天皇は譲位を敢行する。新天皇は後水尾天皇と莉子(秀忠とお江の間に生まれた娘)の子興子に決定した。この事件と譲位によって、徳川家の天皇家に対する優位は決定的となった。

その後も福(春日局)は幕府の使者として 何度も上京し、朝廷関係の事項の神媒をつと める。

第四の職務は、日常のさまざまな幕府の老女としての役割である。将軍家の子女の婚姻行列に連なったり、正月などの祝いの使者として大名家へ挨拶に出向いたりという役割を

こなしている。また、家光の長男家綱の誕生 直後には、生後一ヶ月のお披露目に、春日局 が家綱を抱いて、女房三人を従えて白書院に 出座している。春日局は家綱の乳母ではもは やないのだが、このような重要な行事には、 乳母をも統べる老女として出座していたので ある。

#### おわりに

戦国時代の有能な部将斎藤利三の娘として 生まれた福は、父生存中のわずかな年月こそ 幸せな時期を送ったであろうが、父の死、そ れも謀叛人明智光秀の重臣という立場での死 は、福の人生に暗雲としてのしかかっていた に違いない。その後の結婚も、離婚という形 で終わり、福と四人の子供、それに母は、厳 しい時代を過ごすことになる。しかし、その 時代に父の友人達が温かい援助の手を差し延 べていることに、今と変わらない人間の心の 温かさを見る思いがする。

逆境の中にあって、さまざまな苦難と向き 合ってきたことが、その後家光の乳母となり、 家光成長後は公・私両領域で徳川家と幕府を 支える、欠くべからざる重い任務を与えられ たにもかかわらず、見事にそれらを遂行し、 徳川幕府初期の女性「出頭人」として将軍家 を支えることができた福の原動力となったと 考える。逆境に打ちひしがれることなく、自 らの能力を何倍にも増やすことに成功した福 は、現在の女性たちの生き方にも大きな指針 を提供してくれているように思う。

福ゆかりの寺は東京本郷の天沢山麟祥院と 京都花園妙心寺麟祥院である。天沢山麟祥院 には福の墓があり、福の肖像画も残されてい る。春日局時代の緋の袴を着用した姿で描か れている。また、妙心寺麟祥院には、福一家 が援助を受けた海北友松の長男海北友雪の「雲龍園」が所蔵されている。福は友松への 恩返しとして、友雪を推挙し、友雪はその力 によって海北家を再興した。こうして海北家 は浅井氏旧臣という武士の家から、画家に転 身したのである。



#### トピックス

#### 興禅寺 (兵庫県丹波市春日町黒井)

興禅寺は、山号を大梅山といい曹洞宗の 別格地で、本尊には仏師春日の作釈迦如来 を祀り七堂伽藍がよくととのった名刹で す。

戦国時代、この寺域一帯は後背の山城黒 井城の下館でしたが、天正7年8月明智光 秀の丹波攻めで落城。その戦後処理と西丹 波一円の統治のため、ここに入ったのが明 智光秀の家臣斉藤利三です。今でも斉藤屋 敷の伝承が残り、水濠と高石垣・白のねり 堀のたたずまいは往時の景観をよく残して いて、国の史跡の一部となっています。こ の年のくれ、母お安との間に生まれたのが お福(後の春日局)で、寺内にはお福の産 湯の井戸や腰掛け石などが残り、幼い日の 春日局を偲ぶことが出来ます。





#### (2) 市と浅井三姉妹の生涯 〜大河ドラマ『江 姫たちの 戦国』の放映にあたって〜 長浜市長浜城歴史博物館 太田 浩司

#### 1 父母の結婚と三姉妹の誕生

北近江の戦国大名・浅井長政と、織田信長の妹「市」との間に生まれた浅井三姉妹。その三女が、今年のNHK大河ドラマの主人公「江」(督・崇源院)である。姉妹には、「淀」(茶々)と「初」(常高院)の2人の姉がいた。父・長政と母「市」との結婚時期については、明確に記した史料がなく昔から諸説あるが、小和田哲男氏が主張する永禄11年(1568)4月下旬説が通説で、大河ドラマもこの説に従って進行する。

長政と「市」の長女「淀」の誕生は、永禄 12年(1569)。次女「初」の誕生は、元亀元 年(1570)で、姉川合戦の年と考えられてい る。「淀」と「初」が生まれたのは、小谷城の 清水谷「御屋敷」とみてよいだろう。しかし、 三女の「江」は小谷落城の年=天正元年(1573) の生まれであるから、山上の大広間にあった 御殿で出生したと考えるべきだ。というのは、 小谷城清水谷の「御屋敷」周辺は、前年から 虎御前山に本陣を移した信長軍の侵攻する所 となり、長政一族が住居する状況にはなかっ たと思われるからだ。

#### 2 北近江の交通史上の位置

永禄11年(1568)に至って、織田信長が「市」を嫁に出し、浅井長政と同盟を結ぶ理由は、ひとえに上洛に当たっての布石であった。信長は、この年7月に前将軍の弟に当たる足利義昭を岐阜に迎え、9月には湖南の戦国大名であった六角義賢・義治親子を観音寺城から



追い出し、義昭をともなって京都に入っている。さらに10月には義昭を第15代将軍に据えている。この時、北近江通過に当たっては、 浅井氏との同盟があったので何の障害もなかった。

北近江は古代から京の都の出入口の役目を 果たしてきた。東に向かっては、美濃国関ヶ 原にいたる東山道が伸び、北に至っては越前 敦賀や府中(武生)に抜ける北陸道が通るが、 その分岐点は北近江にあった。都の東と北へ の玄関と言えるだろう。美濃岐阜を拠点とし ていた信長としては、都の東の玄関に当たる 近江の地を押さえない限り、上洛の道は断た れてしまう。そこで、「市」を長政の許へ遣わ し、浅井氏との同盟を成立させたのである。

浅井三姉妹には、都の北玄関として近江の存在も、その生涯に大きな影響を与えた。天正11年(1583)4月、北近江の余呉湖周辺で展開した賤ヶ岳合戦である。この合戦は、「市」が前年に再嫁した越前北庄城主の柴田勝家と、畿内に勢力をもつ羽柴秀吉が、信長亡き後の後継者をめぐって争ったものだ。近江長浜や木之本に本陣をおく秀吉を討つべく、北陸道=北国街道を辿って、畿内進出を目指した勝家だが、賤ヶ岳北の余呉湖畔で秀吉に大敗する。

勝家は北庄城まで帰るが、妻の「市」と共 に自刃、母と義父を失った。三姉妹にとって、 父と母の思い出は、北近江という地と共に語 られることになる。それだけ三姉妹の人生を 北近江が左右した理由は、繰り返すが当地が、 日本の交通史上の重要な位置を占めるからで ある。これは、現在でも変化することなく、 日本の東西交通の幹線である東海道新幹線、 名神高速道路はこの北近江を通過する。

#### 3 小谷落城とその後

さて、話を小谷城に戻そう。天正元年(1573) 9月1日、織田信長は木下秀吉に命じて、小谷城の総攻撃を行い、浅井長政を城内赤尾屋敷に自刃させた。「市」の輿入れによって、織田家と浅井家は同盟関係にあったが、信長が越前の朝倉義景を攻撃することで、元亀元年(1570)4月以来、両家は敵対関係におちいる。同年6月28日の姉川合戦以来、織田信長軍は木下秀吉軍を中心として、小谷に籠城する浅井長政を攻撃し続け、とうとうこの日、落城に至ったのである。

小谷落城に際して、浅井長政の許から「市」と三姉妹が脱出したことは有名な話であるが、その具体的な様子を記した良質の史料は現存していない。また、小谷退去後、「市」と三姉妹がどこで生活していたかについても、確実な史料は何も残っていないが、『総見記』や『浅井三代記』の記述に従い、落城後に「市」と三姉妹を預かったのは北伊勢の上野城(三重県津市所在)の城主織田信包だとするのが通説である。信包は信長の弟であった。その後、彼女らは信長の旧城である清洲に移されたという。

#### 4 北庄落城と三姉妹脱出

「市」は清洲会議の直後に、信長の三男の 信孝の斡旋により、柴田勝家に再嫁すること が決定した。『細川忠興軍功記』によれば、「市」 と三姉妹は伊吹山の麓を通って、勝家の城であった越前国北庄城に至ったとされる。この時、彼女らは小谷城の前を通過し、「江」は初めてその生まれ故郷・小谷城を見ることになる。天正10年(1582)の秋頃のことで、その後しばらく「市」と三姉妹の北庄での生活が始まる。

当時、信長の後継をめぐって、信長次男・信雄と結んだ秀吉と、三男信孝と結んだ勝家の間で、水面下の争いが激しくなっていた。「市」の勝家への再嫁は、明らかに柴田側が、信長後継の大義名分を勝家が得られるように仕組んだものであった。しかし、天正 11 年(1583) 4月21日、先に記したように、夫の柴田勝家が賤ヶ岳合戦で羽柴秀吉に破れ、4月24日には九重の天守閣に火をかけ、「市」は勝家と共に自刃して果てた。

#### 5 秀吉の庇護

北庄城から脱出し、二度目の落城で母を失った三姉妹は、羽柴秀吉の保護下に入り、安土城で生活するようになったと考えられる。『柳営婦女伝系』によれば、落城寸前に柴田勝家は、「市」に命じて三姉妹の脱出を指示するが、まず「一乗の谷へ遣置く、秀吉是を聞、急に安土へ送り入る」と記されている。すなわち、越前朝倉氏の城であった一乗谷に一時逃れた後、秀吉の配慮によって安土城に移されたと解釈できる。安土城は織田家の城であり、この三姉妹は織田家の姫君という認識が、秀吉にあったことを示していよう。

その後、小和田哲男氏の説くように、天正 12年(1584)に大坂城本丸御殿が完成すると、 同城に移ったとみられる。もっとも、「江」に ついては後述するように、その年初めに佐治 一成のもとへ嫁しているので、大坂城への引 っ越しは経験していない。しかし、9 月になって大坂に呼び戻され、秀吉の命で佐治と離縁させられているので、それ以後は大坂城で生活することとなったのだろう。

#### 6「江」の1・2度目の結婚

三姉妹の三女「江」は、最初、尾張国大野城(愛知県常滑市所在)の城主・佐治一成のもとに嫁したと記される。小和田哲男氏によれば、それは天正12年(1584)の初め、「江」は12歳であった。佐治一成の母は信長の妹「犬」であるから、「江」と一成はいとこ同士ということになる。ところが、同じ年の9月頃、小牧・長久手合戦から三河へ帰る徳川家康が、大野川を渡りかねていたところを、一成が船を出して手助けしたことを聞いた秀吉は、「江」を「淀」の病気を理由に呼び戻し、佐治家へ返さなかったという。

その後、20歳の「江」は岐阜城主となっていた羽柴小吉秀勝の妻となる。秀勝は三好吉房と秀吉の姉・ともの間に生まれた子で、兄が関白秀次、弟に羽柴秀長の養子となった秀保がいる。江が秀勝のもとに入ったのは、文禄元年(1592)2月であったが、夫の秀勝は同年9月9日に、朝鮮出兵の途中に24歳で病死してしまう。

#### 7 「初」と夫・京極高次

ここで、「江」の姉に当たる「初」の生涯について少々遡ってふれておこう。北庄落城後、「淀」と共に安土から大坂へ居所を変えた「初」は、「淀」が豊臣秀吉の側室となる前の天正15年(1587)、浅井氏の主君に当たる家筋の当主・高次に嫁入りしたと考えられている。高次は本能寺の変後の混乱では明智光秀に従ったが、その妹「龍子」が秀吉の妻とな

っていたので助命され、天正 12 年 (1584) には秀吉から湖西高島郡に領地を与えられ、「初」と結婚した天正 15 年には高島郡大溝城主となった。その後、天正 19 年 (1591) には近江八幡城主となり、文禄 4 年 (1595) には大津城主となっている。

関ヶ原合戦に際して、東軍であった大津城は西軍の三成軍によって包囲されるが、9月15日の合戦当日に開城、夫の高次は結果的に降伏した責任をとり、剃髪して高野山に入った。この時「初」や「龍子」は大津城中におり、大坂にいた「淀」は城攻めの展開と、二人の安否を大いに気にかけていたと考えられる。大津城は開城したものの、関ヶ原合戦前日まで、西軍の立花宗茂をはじめとする九州勢を釘付けにしたという功績が認められて、高次は戦後に若狭小浜城主として85,000石を家康から与えられる。なお、現在の彦根城天守閣は、この大津城天守閣の部材を使って建造されたものという。

しかし、夫の高次は大坂の陣をまたず、慶長14年(1609)5月3日に、47歳で没した。「初」は出家し、「常高院」と名乗るようになり、三姉妹の中では最も長寿となる64歳で、寛永10年(1633)に江戸で没した。夫・高次は関ヶ原合戦までは近江国内を転々としたので、「初」は三姉妹の中では近江の各地と最も関わり深い。

#### 8 「江」の子どもたち

さて、「江」の話に戻ろう。文禄4年(1595) 9月17日、23歳となった「江」は、秀吉の養 女となって6歳年下の徳川秀忠のもとに嫁い だ。徳川秀忠は、後に徳川幕府第2代将軍と なる人物である。

「江」と秀忠との間には、二男五女が生ま

れた。男子の1人は竹千代(後の第3代将軍家光)で、次男が国松(後の駿河大納言忠長)である。女子については、長女が豊臣秀頼の室となった「千姫」、次女は加賀国金沢藩の第3代藩主・前田利常の室となった「珠姫」(子々姫)、三女は越前国福井藩の第2代藩主・松平忠直の室となった「勝姫」である。四女の「初姫」は、姉である「初」の夫・京極高次の継嗣・忠高(高次側室の子)の室となった。そして、五女「和子」は後水尾天皇の中宮となり、「興子」(後の明正天皇、奈良時代以来の女帝であった)を生み天皇家にも浅井家の血筋を残している。

「江」とその夫秀忠が、2人の男子の内、 弟の国松を偏愛したことは余りにも有名である。国松は竹千代よりも聞き分けがよかった 上、竹千代は病弱であったと言われる。慶長 17年(1612)2月25日、徳川家康は「江」に 手紙を送り、徳川家の家督はあくまでも竹千 代に渡すので、国松については、それを補佐 する人物として育てるよう丁寧に説いている。 写のみが伝わるこの手紙は、その真偽につい て見解の分かれる所だが、一般的には竹千代 の乳母であった「福」、後の春日局が竹千代廃 嫡を恐れて、大御所家康に手を回して出して もらったものと考えられている。

将軍正室・生母、天皇の祖母まで登りつめた「江」は、寛永3年(1626)9月15日、江戸城西の丸で54歳の生涯を閉じた。女性としては最高位である従一位を授けられたその生涯は、戦国一出世した「姫」と言えるだろう。

#### トピックス

#### お江と柏原藩筆頭家老佐治与九郎一成

知多半島の大野城主だった一成は 22 歳のとき、14歳だった江をめとった。一成の母は織田信長の妹。江の母、お市も信長の妹のため、二人はいとこの間柄になる。夫婦仲はむつまじく、二人の女児が生まれた。

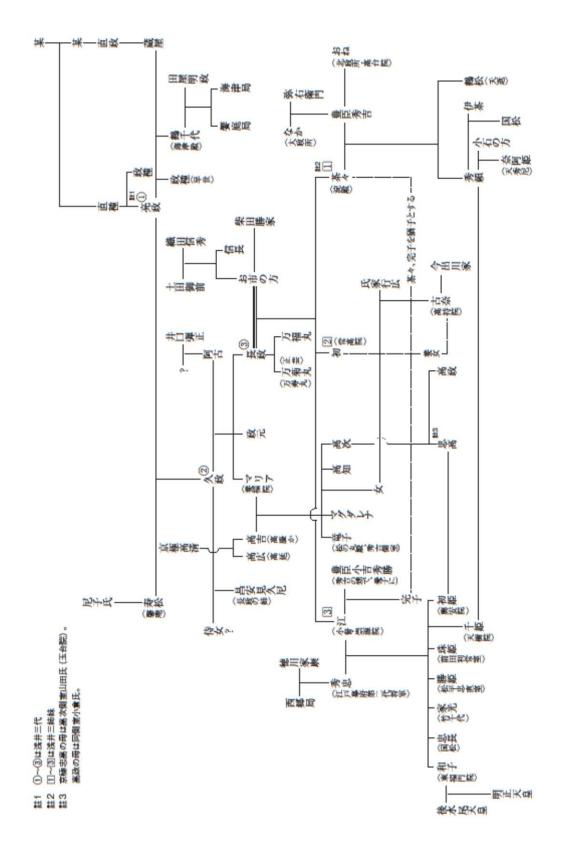
しかし、江の姉、茶々が豊臣秀吉の側室になってから、二人に悲運が訪れた。茶々と江は姉妹のため、一成と秀吉は義兄弟の間柄になる。それが秀吉にとってはおもしろくない。さらに徳川家康と織田信雄の連合軍が秀吉と小牧で戦ったとき、一成は窮地に陥った家康を助けた。それが秀吉の怒りを買ったのだろう。一成と江の夫婦は引き裂かれた。

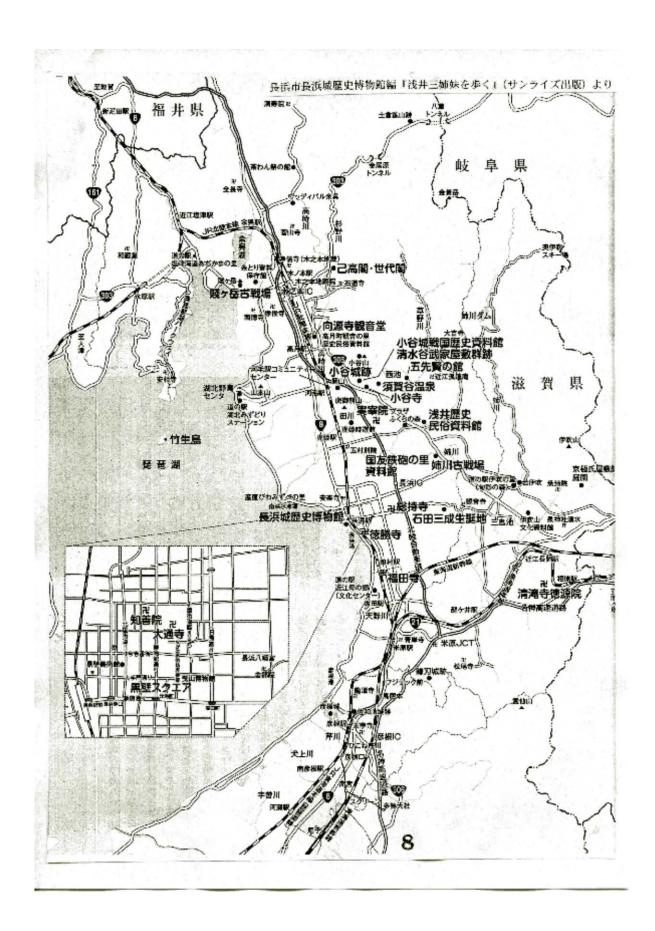
悲運はさらに続き、一成は大野城を追われた。このため一成は、伊勢の安濃津城主で、伯父でもある織田信包を頼った。

その後、信包は丹波へ移った。「この年の秋 に織田信包は伊勢の安濃津城から丹波の柏原 城へと移封を命じられた。この信包と一緒に、 与九郎一成もまた柏原へ移って行った。」(『佐 治与九郎覚書』)

江はやがて徳川秀忠に嫁ぎ、男子を産んだ。「この小督(おごう・江のこと)の出産の噂は、江戸から遠く離れている丹波地方にはひと月ほど遅れて伝わった。その日佐治与九郎は所用あって柏原在へ出掛けていったが、柏原の城下の外れで、いずれも旅装束の十数名の騎馬の一団と出会った。」(同)

その一団は、男子出産を祝うために、柏原藩から江戸へ出掛けていく賀使の一行だった。「与九郎はふらふらとその場に腰を下ろした。…与九郎は大勢の通行人が怪訝そうに見返っていくのも構わず、虚ろな眼でそこに座り込んでいた」(同)(丹波新聞社社長 荻野祐一)





#### (3) 先人に学ぶガレリアフォーラム 「細川ガラシャ・江・春日局 ~女性たちの戦国~」

【主催】財団法人生涯学習かめおか財団

【日時】平成23年9月24日 13時30分~15時30分

【会場】ガレリアかめおか 2 階大広間 【パネリスト】

京都橘大学名誉教授

田端 泰子 静岡大学名誉教授 小和田哲男

大山崎町歴史資料館長補佐 福島 克彦

【コーディネーター】 亀岡市文化資料館長 黒川 孝宏

#### 【進行及び発言内容要約】

今回の先人に学ぶガレリアフォーラムは 丹波亀山の基礎を築いた明智光秀の娘「細川ガラシャ」、丹波亀山城主を務めた羽柴秀勝の妻であり、秀勝の死後は徳川幕府2代将軍秀忠の妻となった「江」、そして、光秀の重臣斎藤利三の娘であり3代将軍家光(秀忠の嫡男)の乳母で、後に「大奥」を創設した「春日局」の3人を取り上げ、戦国を生きた女性たちの実像に迫る。

まず、田端先生から細川ガラシャの生涯 とその役割という内容でお話いただく。父 光秀と織田信長との関係を紹介し、ガラシャの生い立ちと婚姻、本能寺の変をめぐる ガラシャへの影響に触れ、苦難に直面する 中からキリスト教へ改宗する経緯を解説。 逆境の中から生きる指針を発見し、信念を





生き方に転換した。細川家に「義」を貫き、 同時に自らの信念も守り通したとガラシャ の生き様を高く評価された。

次に、小和田先生からはNHK大河ドラマ「江」の時代考証担当という立場から、「江」の役柄とドラマづくりでの扱い、そして、歴史的事実との整合性について、その苦労話の一端を紹介していただいた。浅井三姉妹の数奇な人生が、今回の大河ドラマ化で知られるようになった「江」を中軸に展開されるが、戦国時代から天下統一への激変する世にあって、政治的な婚姻に翻弄されながらも、逞しく強く生き抜く女性としての「江」を再評価された。

また、「江」とは次期3代将軍職を巡って 争うことになる「春日局」について、福島 先生に語っていただいた。父斎藤利三と光 秀との関係を、本能寺の変前後の状況から 史料を引用しながら説明。本能寺の変後に、 首謀者の一人とされた利三の娘でありなが ら、自身は乳母、子どもたちも後には老中・ 大名に昇格させた「春日局」の政治力の高 さに注目された。

以上の各論を踏まえて、黒川館長の司会で3先生方とのディスカッションと会場とのトークを行った。

- 3 人の女性たちが、歴史的事件・出来事 に直面しつつ、武将の妻、将軍の妻、将軍 の乳母として生き抜く様は、まさに「女性 たちの戦国」であった。
- 3 人に共通することは一人の人間として、 女性として逆境を生き抜く逞しさがあった。 「母は強かった」である。そこで忘れては ならないのが、婚姻による実家と嫁ぎ先と の「家」同士のつながりである。

「ガラシャ」「江」「春日局」たちが一人 だけで信仰・信念・信義を貫いたのではな く、それを支えた人たちの存在も注視すべ きである。

「個」と「家」との関係は現代人にとっても大きな課題であり、3人の生き方から 学ぶべき事柄は多いのではないだろうか。

会場とのトークについては割愛する。なお、会場内に山崎昭典氏のギター演奏CD「I・N・E・I〜細川ガラシャの人生〜」の冒頭部分を流し来場者に聴いていただいた。

(文責 黒川孝宏)



フォーラムの最後に、講座「丹波学」受講生を代表して柏原町の梅垣恭子さんが、現在取り組まれている歴史ボランティアの活動のお話しをして下さいました。丹波地域のPRもして下さり、素敵なスピーチに和やかな雰囲気が生まれました。京都丹波とのよき交流が生まれれば嬉しく思います。



#### 現地学習

日時:平成23年9月24日(土)

 $10:30\sim12:00$ 

場所:養源院(京都市東山区)

#### 【養源院】

文禄3年(1594年)、浅井三姉妹の父 である長政の菩提を弔うために長女・ 茶々(淀殿)が豊臣秀吉に願い出て建立 された。元和5年(1619)に火災で焼失 した2年後に三女で徳川秀忠夫人の江に より再建。本堂は伏見城の遺構で、伏見 城落城の際に徳川家康の家臣だった鳥 居元忠らが自刃した廊下を、供養のため に寺の天井に使い「血天井」として有名。 俵屋宗達の「白象図」(重要文化財)は、 自刃した家臣らを極楽へ運ぶ乗り物と して描かれた。「白象図」をはじめ「唐 獅子図」(重要文化財)、襖絵「松図」 (重要文化財)、「波と麒麟図」など宗 達の名品を間近に観ることができるの も大きな魅力である。

寺に伝わるお江の肖像画は江の娘の 東福門院が描かせたものである。豊臣、 徳川、皇室にゆかりの深いお寺として、 徳川歴代将軍の位牌を祀り、江(崇源院) の位牌には菊、葵、桐の紋が透かし彫り されている。境内にお市の供養塔、崇源 院石塔墓(通常非公開)があるが、崇源 院のお墓には4文字の梵字が刻まれ、そ れぞれ「浅井」「豊臣家」「徳川家」「御 所」を表しているという。さまざまな恩 讐を超えて生きた江の「娘として」「妻 として」「母として」の切なる願いを感 じずにはいられない。







(江肖像画 養源院蔵)





#### 参考【伏見城の戦い】

関ヶ原の戦いの前哨戦。

豊臣秀吉の死後、次の天下人の座を狙う徳川家康は、慶長5年、度重なる上洛命令を無視した上杉景勝を公儀に反抗する逆臣として征伐すると称し、会津攻めを開始した。家康は、鳥居元忠、内藤家長、松平家忠、松平近正ら1800名ほどの兵を伏見城に残すに留め、徳川軍主力を率いて会津攻めに向かう。

家康が鳥居元忠らわずかな守備兵を 伏見城に残して会津攻めに向かったの は、石田三成ら反・家康派を挙兵させる 狙いがあったからだとも言われている。 事実、家康は7月18日の時点ではまだ 江戸城にあり、7月21日になってようや く会津に向かって進軍を開始していた。 予見通り三成らは挙兵。真っ先に伏見城がその標的となったのである。兵力差から考えれば、短時日で決着するはずの戦いであったが、鳥居元忠らの予想外の奮戦で、攻城側は苦戦を強いられた。ここで10日以上もの期間をかけたため、西軍のその後の美濃・伊勢方面に対する攻略が大きく遅れる要因になったとも言われている。

最後まで抵抗した元忠。その最期の時には、彼の周りには十余名しか残っていなかったとされる。元忠は、家康がまだ「松平竹千代」とよばれて今川氏の人質だった頃からの側近の一人であり、家康の絶対の忠臣であったと言われている。家康が会津に向かう前夜の伏見城で、元忠と家康は昔話に花を咲かせたという。家康は、忠実な部下の死を悲しみ、その功績もあって嫡男・忠政は後に磐城平藩10万石を経て山形藩24万石の大名に昇格している。

元忠らの血潮に染まった床板が、後に 京都市内の養源院・宝泉院・正伝寺・源 光庵などの寺に移築され、今なお「血天 井」として現存している。

## (4)明智光秀と細川ガラシャ亀岡市文化資料館長黒川孝宏

#### はじめに

細川ガラシャが生きた戦国時代は、戦国 武将の妻として、戦場に赴く「夫」への「義」 と嫁いだ「家」への「義」が求められる時 代であった。

一方、父である明智光秀が活躍した当時は、織田信長をはじめとする有力な戦国大名が群雄割拠し、隙あらば下の者が上の者を討つという「下剋上」の風潮が色濃く残る厳しい時代でもあった。

今回、光秀の娘として誕生し、細川忠興 の妻となった細川ガラシャを、光秀の武将 像と父親像とを紹介しながら、歴史の本流 でその信念を貫いた女性として紹介したい。 その生き様は現代を生きる私たちにも大き な共感を与えている。

#### 1 明智光秀の武将像

細川ガラシャといえば、光秀の娘玉子として有名である。光秀もまたガラシャ以上に歴史にその名をのこす武将として知名度は高いが、「主君殺し」「反逆の家臣」「三日天下」というイメージが強いのは事実である。

しかし、最近の歴史研究の進展から光秀 を評価する傾向が高くなっている。ここで は私なりの光秀評価を踏まえ、以下光秀の 武将像について簡単に触れておきたい。

「鳴かざれば~」という句ではじまる有名な武将の人物評価がある。

「鳴かざれば殺してしまえホトトギス」は、あらゆる既存の権力・権威に対抗し、 実力本位の合理主義者であった織田信長で、



豪快豪傑さとともに冷淡冷徹な人物像を示 している。

「鳴かざれば鳴かしてみしょうホトトギス」は、実学にたけており、人心掌握に特に優れた才能を発揮した豊臣秀吉で、奇抜な才覚で出世した人物像を指している。

「鳴かざれば鳴くまで待とうホトトギス」は、最後に天下統一を成し遂げた徳川家康で、忍耐と我慢を貫徹した人物像をいいえている。

ならば光秀はどのように歌われたのか? 現存する岸和田市本徳寺の光秀画像を見る と、温和な雰囲気を強く感じる。「鳴かざれ ば、放してやろうホトトギス」という優し さが光秀にはあった。その優しさが光秀の 長所であり短所ともなったといえる。

信長は京都において、天皇朝廷・有力貴族との政治交渉、室町幕府の足利義昭との政争、有力寺院神社との対立などが連続する状況下で、家臣光秀がその調停役として活躍し、さらに丹波攻略という軍事的課題も5年という期間はかかったものの見事に平定している。信長により坂本と丹波が光秀に与えられ、近畿管領としての地位を確立した。信長をして「天下の面目をほどこし候」といわしめ、並み居る有力家臣の中でも、光秀に信長が最大の評価を与えている。この文言に「本能寺の変」前の光秀の武将像を端的に知ることができる。

#### 2 明智光秀の父親像

次に、光秀の父親像についても考えてみ たい。光秀の父親像を示す具体的な史料が あるわけではないが、光秀の家族構成など から推測したい。

光秀の妻は熙子で、妻木範熙の娘とされている。光秀は、当時としては珍しく生涯にわたり側室を持たなかったといわれている。光秀との夫婦愛がそれだけ深かったのかもしれない。2人の間に生まれた子どもたちには、三男三女説(『太閤記』)三男五女説(『系図纂要』)六男五女説(『明智系図』)と諸説があり断定ができないが、女子については三女説が有力で、ガラシャをとりまく姉妹について述べてみたい。

長女は倫子で、後に荒木村重の子村安に嫁ぐが、謀反を企て信長に滅ぼされたため、 光秀の家臣秀満と再婚する。秀満は明智秀満と称し光秀の一族家臣となる。本能寺の 変後の山崎の戦いでの敗戦で、倫子は坂本城で自害した。

二女は名前知らずで、津田信澄(信長の 甥)に嫁ぐが、本能寺の変で神戸信孝(信 長の三男)に大坂城で夫婦ともども殺害さ れた。

そして、三女がガラシャで、玉子は末娘 として誕生した。ガラシャの生き様につい ては次の項目で紹介したい。

戦国の世の常として、それぞれに有力な 武将の妻として娘を嫁がせ、明智家とのつ ながりをより強固ものもとする意図が、父 光秀にあったことは疑いもないが、本能寺 の変の直前では、丹波・丹後・近畿に信長 の有力家臣としての婚姻関係を有していた ことになる。

だからこそ、戦国武将の妻としての生き

方を、父光秀が娘たちにしっかりと説き含めたことは十分に想像される。

光秀が単なる武闘派的な武将ではなく、 茶道をたしなみ、連歌・和歌などにも造詣 が深く教養ある武将であったことは、当時 の史料からも知られる事実であり、文武と もに優れた父親像として、娘たちの育成と その成長に大きな影響を与えていたと考え られる。

その教えと生き方を実践し、歴史上に足跡をのこしたのが三女玉子であった。

#### 3 本能寺の変と細川ガラシャ

ここで、あらためて三女玉子の生い立ち から以下、簡単に列記したい。

- ・永禄6年(1563)、光秀の三女として誕生。
- ・天正6年(1578)16歳、細川忠興と結婚。
- ・天正8年(1580)18歳、長男忠隆を生む。
- ・天正 10 年(1582) 20 歳、本能寺の変・山 崎の戦い。味土野に幽閉(約2年)。
- ・天正 12 年(1584)22 歳、秀吉が忠興と再 婚を命じる。二男興秋を生む。
- ・天正14年(1586)24歳、三男忠利を生む。 忠興、秀吉の九州攻めに参陣。玉は大坂 と丹後を往来する。
- ・天正 15 年(1587) 25 歳、入信(洗礼名ガラシャ「迦羅奢」= 恩寵という意味)
- ・文禄元年(1592)30歳、忠興朝鮮出兵。羽 柴秀勝 (秀吉の甥)も出兵しともに 9番隊(秀勝の妻は江)
- ・慶長5年(1600)38歳、7月17日大坂細川邸にて家臣の手によって死去。9月15日関ヶ原の戦い。東軍勝利。

玉子が 16 歳の時に、細川忠興と結婚するが、信長の肝煎りによる婚儀であったことは周知の通りである。細川藤孝と光秀はも

ともと室町幕府の幕臣であったが、ともに 信長の家臣となった。信長に藤孝の子忠興 に光秀の娘玉子を嫁がせることで、両家の 関係を強化する意図があった。「天下の面 目をほどこし候」といわしめた光秀の評価 が婚姻にも反映したといえる。

玉子にとっても順風満風の時であったが、運命の大事件が勃発する。父光秀による本能寺の変で、信長が討たれ、光秀による天下取りが進むと思われた間隙を突いて、豊臣秀吉が山崎の戦いで父光秀を敗死に追い込み、天下人への道を邁進することとなる。細川家は光秀との婚姻関係をはばかり、藤孝は出家して幽斎と名乗り、当時20歳の玉子を味土野に幽閉した。約2年間にわたり人里離れた丹後の山奥で暮らした。

光秀がなぜ本能寺で信長を討ったのか、 その原因理由については、野望説・怨恨説・ 前途不安説・足利義昭黒幕説・信長征夷大 将軍任官阻止説など枚挙に暇がなく、その 詳細をここで紹介することはできない。前 述した当時の社会的風潮である「下剋上」 を考えるならば、本能寺の変は、その後の 天下統一と封建社会成立に向けての「最後 で最大の下剋上」であったと位置付けたい。 2年間の幽閉生活の中で、父光秀を恨み 続けたのか許したのか、その心境を知るこ とはできないが、光秀の娘として「最後で 最大の謀反人の娘」としての烙印を押され たことだけは確かであった。

秀吉に許されて忠興と再婚し、二男三男を出産する。ただ、忠興は側室おりょうを持ったことから、玉子との夫婦関係は微妙なものになり、玉子の苦悩が増長されていく。さらに、忠興が秀吉の九州攻めに参軍しており、忠興の嫉妬心から玉子は大坂城

下の屋敷からの外出すら許されない困難な 状況に追い込まれていく。その時に玉子は 心の平安をキリスト教の教えに救いを求め 熱心に信仰し、25歳で洗礼を受けた。洗礼 名ガラシャで「迦羅奢」、恩寵という意味が ある。一人の女性として生き方を真摯に考 え抜いた結果であった。

#### 4 細川ガラシャの最期

豊臣秀吉による朝鮮出兵に、忠興も羽柴 秀勝(秀吉の甥)とともに9番隊として参 加しており、夫の留守を預かる中でその信 仰を深めた。秀吉の死後、徳川家康と石田 三成の対立が激化する。家康が上杉討伐に 挙兵した際に、三成は参軍した忠興をはじ めとした武将の家族を人質にすることを目 的に、大坂城下の屋敷に軍勢を差し向けた。 一番の狙いは忠興の妻細川ガラシャで、人 質になるように強制するが、ガラシャは敢 然と拒否した。

その時の様子は侍女霜の「霜女覚書」から知ることができる。人質となれば忠興の働きに大きな支障となる危機を前に、キリシタンとして自害することが許されないため、家臣小笠原昌斎に命じて自身を切らせるという覚悟の上の最期を遂げる。慶長5年(1600)7月17日。38歳の一生であった。天下分け目の関ヶ原の戦いのわずか2ヶ月前で、三成の計略を失敗させたガラシャの決然とした態度と行動は、「大謀反人の娘」という烙印から一転、「武門の誉れ」として高く評価された。

38歳にして「波乱万丈の人生」といって も過言ではない生き様をのこしたガラシャ には、光秀の武将像と父親像が強く反映し ていたと思いたい。最大の危機に直面した ガラシャに、武将の妻として取るべき行動 に導いたのは光秀の武将像であり父親像で あった。

#### おわりに

光秀は「時は今 天が下知る 五月かな」を連歌の初句として詠み、本能寺の変を決断したともいわれている。一方、ガラシャの辞世の句は「ちりぬべき 時知りてこそ世の中の 花も花なれ 人も人なれ」である。ともに「時は今」「時知りてこそ」と「時」が詠み込まれている。単なる偶然なのか、父の思いを受けてのガラシャの句なのか、今となっては知るすべはない。

ここで「時」が何を意味するのか、それ は政情の決断・英断や時代の潮流・時流な どを意味しているよう感じるが、いずれに しても、父と玉をはじめとする娘たちが迎 えたのは、悲劇的な人生の結末の「時」で あった。

歴史的に名を残す数少ない女性の一人として、かつ武将の妻として、夫と家への「義」を見事に貫徹したガラシャの、苦難の中でも自己の尊厳と愛情を貫く人間性と、その信仰心の強さは、時空を超えて現代の私たちに大きな感動を与え続けている。

#### 【参考文献】

『明智光秀』(講談社文庫)桑田忠親 /昭和62年

『明智光秀』(新版人物叢書) 高柳光寿 吉川弘文館/平成3年

『細川ガラシャ』(ミネルヴァ日本評伝選) 田端泰子/平成 21 年

#### トピックス 丹後宮津桔梗の会

私たちは、現在 16 人で、細川ガラシャを顕彰 する活動をしています。ですが、最初からガラシ ャを研究しようと組織を立ち上げた訳ではあり ません。

元々は、一緒に遊んだり、旅行に行ったりする 昭和 18 年度生まれの同級生のグループ。いろん な所に旅行し、そのつど、自分たちのまちを見つ め直してみると、気になるところが多くありまし た。そこで、勤めていた人たちも退職し、時間に 余裕も出てきたこともあって、自分たちに出来る ことはないだろうかと考え始めたことがきっか け。まずは、宮津の玄関口にあたる浜地蔵公園(新 浜)の清掃活動を行いました。

細川ガラシャとの出会いは、数年前より関心を もって調べておられた京都暁星高校の玉手先生 のお話を聞いたこと。

ガラシャは明智光秀の三女として生まれ、16歳の時に細川忠興と結婚。忠興とともに宮津の地に入ります。運命が一変するのが、父・光秀が起こした本能寺の変。まさにここ宮津での彼女の悲運に、言葉を失います。しかし、様々な不遇に負けることなく、強く生き抜いた人です。

それまで、私たちもほとんど知らなかったガラシャですが、先生のお話を伺い、芯の強い信念を持った生き方に大変ひかれ、宮津の歴史の奥深さ、そのゆかりのある場所を顕彰し、調べてみようということになりました。

会の名前は、細川ガラシャの実家である明智家の家紋にちなんで「丹後宮津桔梗の会」。今は、広く市民の皆さんにも参加を呼びかけて、勉強会などを開催。

私たちの活動が、まちの歴史資源を掘り起こ し、地域振興につながればうれしく思います。

# (5) 明智光秀の妻 凞子 ~その愛と献身~ 歴史作家・日本ペンクラブ会員 中島道子

#### はじめに

古来、良妻・賢妻と呼ばれる人は、戦国時代に限って言えば、豊臣秀吉の妻「おね」、山内一豊の妻「千代」、前田利家の妻「まつ」などと、夫が出世したからこそ光があたった。

即ち、夫が世に出なければどのような美談 の持ち主でも、語り伝えられることはない。

その中の一人に、明智光秀の妻がいる。と ころで光秀が見直されてきたのは最近のこと で、実に久しく「叛将・逆臣・裏切り者」と 言われ続けてきた。

その見直しが始まったのは、二十年ほど前からだ。そして今日では、「明智光秀公顕彰会」なるものもあちこちで立ち上げられ、「本能寺ノ変の真相に迫る」などという論文や解説・小説等が次々と出版され、光秀の名誉回復が始まった。

そうなると妻の存在や生き様にも光が当たってくる。そこで知る人ぞ知る逸話を紹介することにしよう。

#### 1 松尾芭蕉の一句

凞子顕彰の第一号が芭蕉とは驚きだ。

今から三百余年前、「奥の細道」の旅を終えた芭蕉は、その後、伊勢参宮を終えて門弟の山田又玄宅に止宿した。

そこを辞する時、又玄の妻に一葉の句を遺した。

「月さびよ 明智が妻の はなしせむ」



である。

生涯に約千句ほどの句を残した芭蕉が、女性を詠んだ句は右の一句のみである。よほど明智光秀の妻の逸話に心を動かされたのだろう。

では、そんな光秀の妻の美談を、芭蕉は一体どこで耳にしたのだろうか。

その佳話は、旅の終盤、越前(福井県)坂 北郡 (現、坂井市丸岡在)の 森 念寺門前辺 りで、在所の人から耳にしたようだ。



#### 2 髪の毛を売った凞子

美濃から逃亡してきた(後述)光秀が、越 前坂北郡在でどうやら越前守護大名朝倉義景 に仕官できたのは数年後のことである。

そしてある日、朝倉家の将を数人、称念寺 に招いて歌の会を催した。会の後、諸将たち を喜ばせたのは夕餉の膳の見事さであった。

薄暮、客将たちを見送ってから陋屋へ帰ってくると、驚いたことに凞子の頭に髪の毛がなかった。

(さてはあの膳は凞子の髪で!)

髪のない、細い凞子の肩を抱いて、光秀は 涙を流しながら言った。

「\*\*だい。凞子よ。いつの日かわしは、必ず出世してそなたを玉の輿に乗せよう。」と。 光秀が、その約束を果たすのは、十年後である。即ち朝倉家から美濃の織田信長に鞍替えし、歴戦の功名をあげて坂本城主となる。

琵琶湖を臨む名城といえば、湖東の安土城 と、湖西では光秀の坂本城である。

そこへ凞子が移ったのは、元亀3年(1572年) 三十八歳ごろである。

既に三人の娘を持ち、更に二人の息子にも 恵まれていたが、菩提寺の西教寺(天台真盛宗 総本山) へ参詣するほかは、外へでることは なかった。これには理由がある。

#### 3 赤痣の女

赤痣とは凞子の左頬から首筋へかけて残った疱瘡の痕である。

美濃妻木の土豪、妻木範熈は、同じ土岐一門の明智との縁組みを計るべく、明智光秀との婚約を成立させた。

ところが娘凞子がおぞましい疱瘡(天然痘) にかかり、一命はとりとめたものの、美貌から醜女に変わってしまった。

「そんな顔でも…」 と伺ってみると、

「凞子に変わりはない。」という返事で輿を送った。

新婚の初夜、胸まではだけて、

「こんな女でもよろしいのですか。」 と捨て身の覚悟で身を晒した凞子に、光秀は 驚いた。

(直き女よ!)

戦国を生きる妻には、こんな女がいいと思った。 美醜ではない、覚悟のある女である。

「凞子よ、われらは夫婦になるのじゃ」 こんな優しいことばを貰おうとは思っていな かっただけに、その夜、凞子は涙のあるだけ を流した。

(この人のために、わたしは…) 死ねるという覚悟である。そんな姿に光秀は 衝撃と感動を覚えた。この二人の結びつきは、 まことに稀有であろう。

そして子を産み幸せだったが長くは続かなかった。

#### 4 逃亡の苦難坂

「油坂峠」越えに哭く

弘治2年(1556)光秀の明智城は、美濃の 斎藤道三の息子、義龍に攻められ落城、叔父 光安の勧めで越前へ逃亡することになった。 従うは凞子と三歳の娘、倫。そして従弟の弥 平次光春である。長良川沿いに北上、美濃白鳥 まできたとき凞子は立ち止まった。

「わたしはここまでです。どうかお逃げ下され。わたしのことは構わないで。」 う動車の体で、これ以上歩けず、しかも戦々たる山脈を仰いだとき凞子の脚は止まってしまった。名にし負う越前・美濃を岐ける両台山系、嶮峻で知られる油坂峠である。 「何を言うか。わしの背に負われろ。」 腹がでているため、光秀の背に仰向けにならなければならない。光秀は凞子の手肢をくくり付けると、光秀は腰を揺らしながら峠を登りはじめた。左右に大きく揺れる腰。ハア、ハアと吐く荒い呼吸を聞きながら、凞子はこのとき、

(この夫のためなら、わたしは地獄のはてまでも…)

という強い絆と愛を覚えた。

越前での選塞に耐え、髪売りまで決意したのは、光秀の愛に応えるためだった。

歴史に残った女性で、ここまでやった妻は 他にいないのではなかろうか。

#### 5 凞子、逝く 光秀を残して

凞子が苦労多い命の火を消したのは天正 4 年 (1576) 11月7日、42歳であった。

光秀の 55 歳の死からみて 13 年も早い死で ある。

この年の4月、光秀は信長の本願寺攻めに 出陣中、四天王寺の陣中で病にかかり、やむ なく従卒らに担がれて坂本に帰ってきた。

それからは凞子の出番。名医にかかりながらも、昼夜を分かたぬ凞子の懸命な看護が続いた。お陰で光秀は快復して戦地に戻ったが、 今度は凞子が倒れた。

医者や侍女たち、それに娘たちの手篤い看病にもかかわらず、光秀が帰ってきたときは 虫の息であった。

「凞子よ。わしの代わりに死んではならぬ。」 と叫び続けたが薬石効なく、波乱の多い、生 涯の幕を閉じた。

(よき妻であったわ)

早くに父と死別し、母とも別れた光秀にとって、凞子はかけがえのないない伴侶であっ

た。

そこで光秀は菩提寺西教寺で、盛大な葬儀を催した。大名夫人の葬儀とあって、領内の武家のみか、町衆や村人たちの参拝も認めた。

四百三十余年を経る今日、墓所の片隅に鎮 まる小さな墓に、香花は絶えない。光秀の墓 碑が建つのは後年である。

戦乱相つぎ、討ち討たれる戦国期にあって、 妻の墓が残るという例は少ない。まして、久 しく逆臣扱いを受けてきた光秀とその妻凞子 の墓が、顕在していたことに驚く。

重ねて言うが、それは光秀が坂本城主だったからこそあり得たことだろう。光秀の死後であったら、熈子の墓が存在することはない。

つづけて蛇足になるが、小説やドラマ等で、 信長の妻 (濃姫) や凞子が「本能寺の変」ま で生きていたとしている。 資料がなかったか らか、その方がドラマチックだからという考 えからかもしれない。



天正四南子年十一月七福月真祐大坊 明智日南守殿御台 香寺に葬る 五輪村

天正二甲戌五月十五日 梅岩廣香鄉四郎 讓州昭智三息 一石五輪塔 一石五輪塔



#### 6 凞子頃の句碑建立と「明智光秀顕彰会」 設立

平成5年11月23日、西教寺境内、凞子の墓前に芭蕉の句碑が建てられ、寺関係、市庁、市内外の文化人を集めて盛大な句碑の除幕式が行われた。芭蕉没後三百年である。

句は例の「月さびよ…」である。(句碑の揮 亳は私、中島道子である。寺より依頼された。)

参集してこられた人々には、あるいはこの 句の意味が解らなかったのではなかろうか。 そこでこの後、講演会が持たれ、芭蕉と明智 が妻のはなしをさせてもらった。

当時、芭蕉といえば近江とのゆかり深く、 まさか越前の話がでてくるとは思いもよらな かったろう。

貧窮の光秀を支えた凞子の純情、献身が、 芭蕉によって証されたのである。

そして平成元年6月14日、西教寺は「明智 光秀顕彰会」を設立した。

この設立については、福井市東大学町に存在する「明智様」信仰に因るものだ。貧しい農家三軒が、四百年来祀り続けてきた小さな調がある。

このことを西教寺に直言し、当時の宗務総 長、片岡義道師の見識と計らいによって「顕 彰会」は設立された。

人との出会い、心の触れ合う感動こそが、 物事を実現させ、進展させていくものである。

#### トピックス 明智光秀公ゆかりの地連絡協議会

当協議会は、「各地を統括した名君としての光秀」を一人でも多くの人に知ってもらいたいという主旨のもと、2007年8月、全国の7市町が集まって発足しました。

光秀の功績を全国の人々にアピールしながら、ゆかりの地の観光振興を図り、「名君・ 光秀」を大河ドラマに誘致するための署名運動など精力的に動いています。

現在は、福知山のほか、明智城址がある岐阜県可児市や娘のガラシャにかかわりの深い宮津市など 14 市町の団体で構成されています。

平成23年11月18日、福知山市民会館で第5回総会が開かれました。福井、岐阜、滋賀、京都の4府県の顕彰会や観光協会のメンバーら26人が出席し、光秀をPRするための活動をそれぞれ紹介しました。

内藤太郎会長(亀岡市観光協会会長)は「誘 致の署名は約2万7000人分集まり、気運が 高まってきた。観光振興、経済への波及効果 が期待できる。各地域で取り組んでいきた い」とあいさつ。そのあと、「酒などを造っ ている」(岐阜県可児市観光協会)、「菩提寺 の西教寺で顕彰会の総会を開いている」(滋 賀県大津市の明智光秀公顕彰会)など、ゆか りの地ならではの活動を紹介しました。「『逆 臣』の武将から『天下の名将』として発信し ていくことができれば」という意見が出たほ か、府内7市町でつくる「NHK大河ドラマ 誘致推進協議会」が平成23年設立され、11 月 16 日には大河ドラマの企画書などを持っ て顧問の山田啓二知事と会長の小田豊・長岡 京市長がNHKに要望書を提出したことが 報告されました。

#### 講師紹介 3

#### 田端泰子氏(9月10日講師)

兵庫県神戸市生まれ。京都大学文学部卒業。文学博士。元京都橘大学学長。NHK「その時歴史は動いた」「歴史秘話ヒストリア」で解説を務める。

著書に、『乳母の力 歴史を支えた女たち』(吉川弘文館)、『細川ガラシャ散りぬべき時知り てこそ』(ミネルヴァ書房)、『山内一豊と千代 戦国武士の家族像』(岩波新書)、『北条政子 幕府を背負った尼御台』(人文書院)、『女人政治の中世 北条政子と日野富子』(講談社現代新 書)、『戦国の女たちを歩く』(山と渓谷社)、他多数。

#### 太田浩司氏(9月17日講師)

東京都生まれ。1986年明治大学大学院文学研究科史学専攻修了。同年から長浜市長浜城歴史博物 館に勤務し、北近江の村落や戦国大名・浅井氏の研究を手がける。「羽柴秀吉と湖北・長浜」(1988年)、「石田三成第二章」(2000年)、「田中吉政とその時代」(2005年)、「一豊と秀吉が駆け た時代」(2006年)など数々の特別展を企画。現在長浜市長浜城歴史博物館参事。NHK大河ドラ マ「江~姫たちの戦国~」への資料提供者。

#### 中島道子氏(10月22日講師)

福井県三国町出身。実践女子大学国文科卒業。55歳まで福井で教員生活を送り、退職後上京し、 作家の道を歩む。日本ペンクラブ会員。明智光秀公顕彰会副会長。福井工業大学客員教授。 著書に『湖影―明智光秀とその妻熙子』(KTC中央出版)、『秀吉と女人たち』(動文社)

『江一波瀾と愛憎の生涯』(世界文化社)、『前田利家と妻まつ』(PHP文庫)、 女房(おんな)たち』(立風書房)、『山内一豊と妻千代』(PHP文庫)、『濃姫とひろ子ー信長の妻と光秀の妻』(河出書房新社)、『岩佐又兵衛-怨念の絵師』(河出書房新社)、他多数。

#### 小和田哲男氏(9月24日パネリスト)

静岡県生まれ。早稲田大学卒業。2009年まで静岡大学教育学部教授を務め、現在静岡大学名誉教 静岡県生まれ。早稲田八子卒業。2009 年まで 静岡八子教育子司教技を 核め、先任 静岡八子石高教授。 NHK「歴史秘話ヒストリア」やNHK教育テレビ「NHK高校講座日本史」などにも出演し、わかりやすい解説には定評がある。 NHK大河ドラマ「秀吉」(1996 年)、「功名が辻」(2006年)、「天地人」(2009年)、「江〜姫たちの戦国〜」(2011年)の時代考証も務める。 ベストセラーとなった『日本の歴史がわかる本』や、『春日局 知られざる実像』(講談社)、『国際情報人信長』(集英社)、『近江浅井氏』(新人物往来社)、『桶狭間の戦い信長会心の奇

襲作戦』(学習研究社)、『明智光秀~つくられた謀反人~』(PHP新書)、『徳川秀忠凡庸な 二代目の功績』(PHP新書)、『北政所と淀殿-豊臣家を守ろうとした妻たち』(吉川弘文館)、 等著書多数。

#### 福島克彦氏 (9月24日パネリスト)

大山崎町歴史資料館学芸員。専門分野は日本中世史、城郭史。主な論文に「織豊期における城郭・城下町の地域的展開」、「城郭研究から見た山科寺内町」、「明智光秀文書目録」等がある。

#### 黒川孝宏氏(10月1日講師)

広島県出身。龍谷大学大学院文学研究科博士後期課程修了。昭和60年から亀岡市教育委員会に勤 務。亀岡市文化資料館開館後は、歴史分野の学芸員として、「石田梅岩展」(昭和 60 年)、「円山応学展」(昭和 63 年)、「明智光秀と丹波・亀山展」(平成 2 年)、「南北朝時代の丹波・亀山展」 (平成5年)、「探求!丹波亀山城展」(平成11年)等の展示会を担当。平成3年から亀岡市調査 執筆委員。平成8年から亀岡市文化資料館館長。

#### 山崎昭典氏(10月1日講師)

京丹後市網野町在住。ギター指導者。歴史ファンらでつくる「丹後宮津桔梗の会」の会員から、 細川ガラシャの生涯をテーマにした曲作りの依頼を受け作曲。曲は約7分間のギターソロで、タイ トルは「I・N・E・I」。決して平たんな歩みではなく、陰影に富んだ深みのあるガラシャの生 涯をイメージして名付けられた。歴史講演会等で演奏活動を行っている。

#### 4 編集後記

平成23年度講座「丹波学」、過去最高の180余名の方々に受講をいただき、開講することができました。とりわけ本年度は女性の受講者が100名を越えました。講師に著名な先生方をお招きすることができたこと、また最近の歴史ブームの影響もあったかと思われますが、地域の歴史に関心を持つ人々が増えていくことは、嬉しく頼もしいことです。

歴史学が取り上げる時代区分として、戦国時代は、明治維新期と並び人気の高い時代です。戦乱の世にあって、時代に翻弄された女性たちの悲劇は、人々の心をとらえます。しかし、女性たちはただ時代の波にのまれ、犠牲となって生きてきただけなのでしょうか。男性の権力闘争や時代の大きな転換点において、女性が果たした役割は、実は大変大きなものがあったのではないでしょうか。もちろん、史実としては確かなものは多くはありません。史料の中で女性に関するものは大変少なく、名前も分からず、「娘」とだけ記されるものが多いと言われます。ただ、女性たちが、「妻として」「母として」何を感じ、考えたかは、推測できるものであるし、その推測はあながち間違いではないと考えます。そして、そうした女性たちの願いや声は男性たちの判断や行動に大きな影響を与えたであろうことも想像できます。

講師の先生方は、そうした女性たちの「強さ」や「優しさ」、また「家族の愛」といったことについて、私たちに投げかけて下さいました。田端泰子先生は、逆境をはねのけた春日局の生き様をそれを支えた人々の存在も交えてお話し下さいました。太田浩司先生は、淀君や江のたくましい生き様を、黒川孝宏先生は、細川ガラシャの生き方の陰に父明智光秀の大きな愛があったことを、中島道子先生は、光秀と妻熙子の深い夫婦愛をお話し下さいました。小和田哲男先生も、「前田利家の妻まつが、利家をたしなめたこともあったようです。」とお話し下さいました。そうしたお話しをお伺いするなかで、何か救われる思いもしましたし、歴史を身近に感じることができました。そして改めて人間のすばらしさを感じました。

「歴史を学ぶことはこれからの自分たちの生き方を探すためである」と言われます。目まぐるしく変化する時代の中で、先の見えない状況であると言われます。しかし、人間が人間である限り、変わらぬものがあると思います。東日本大震災を通して、「家族の絆」や「ふるさと」について、私たちはあらためて考えました。講師の先生方のお話と重なり合う部分が多くありました。そうしたものを真ん中において、私たちは、これからの自分のあり様や地域のあるべき姿を考えていきたいと思います。

企画の段階から、黒川孝宏先生、ガレリアかめおかの皆様には大変お世話になりました。 学びのエリアを京都丹波を含めた大丹波に拡大したことで、「丹波国」をより深く正しく知ることができた気がします。新しい交流が始まる予感もします。

丹波地域の歴史的遺産に目を向け、その価値を再認識し、先人たちの生き様を知ることで、皆様が丹波地域により愛着と誇りを持たれ、共通の学びを通して新たなつながりやネットワークを構築いただければ幸いです。そしてさらに、丹波地域の活性化につながる新たな展開を皆様がつくって下さるとすれば、大変嬉しく思います。

#### 平成23年度講座「丹波学」講義録

平成24年3月発行

発行 (財) 兵庫丹波の森協会 丹波の森公苑 文化振興部 〒669-3309 兵庫県丹波市柏原町柏原5600 TEL 0795-72-5170